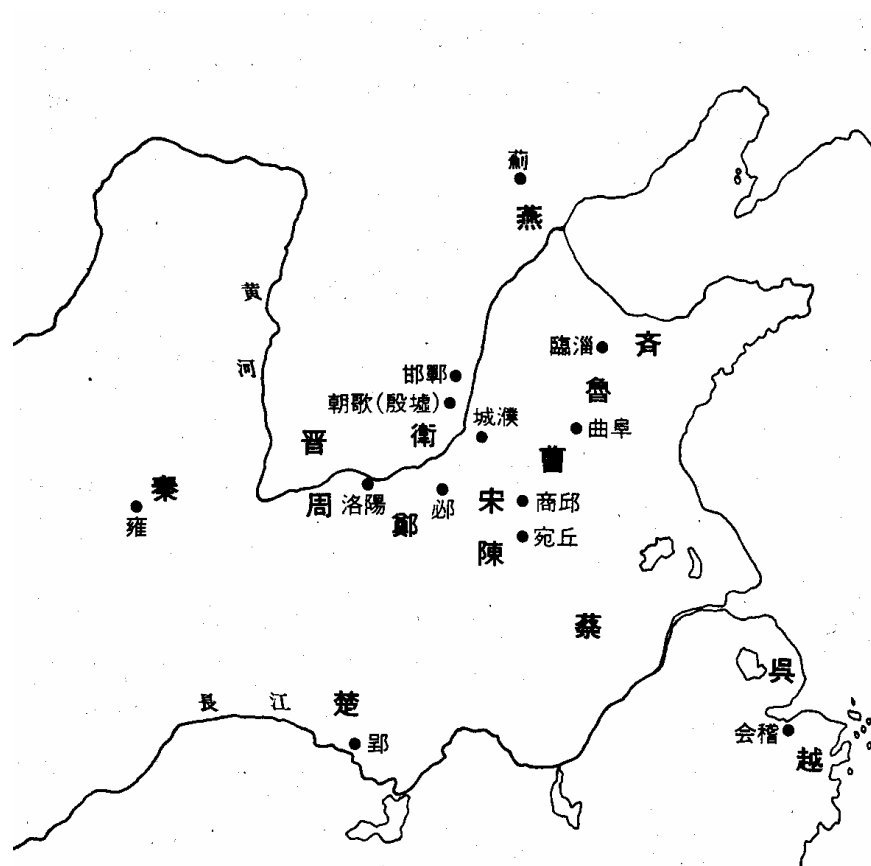


第二章：「論語」と時代背景 春秋時代の君主と宰相たち

「周（東周王朝）」の平王が洛陽に遷都して、中国史で「春秋時代」と呼ばれる、諸侯同士が併呑しあう、弱肉強食の戦乱の時代に突入しました。周王室の統制力はすっかり落ち、名ばかりの存在になっていきます。司馬遷の「史記」・周本紀は、「平王の時、周室衰微し、諸侯、強きは弱きを併せ、齊、楚、秦、晉、始めて大なり。政、方伯（諸侯の大なるもの）に由る」と記述しています。狩野直喜著「春秋研究」（みすず書房）によれば、周初八百あった国々が、春秋時代には百二十四力国に減り、春秋時代末期まで残ったのは大国の齊・楚・秦・晉、中等国の宋・魯・衛・鄭・燕、小国の曹・陳・蔡、そして新興国の呉・越、などの十数力国に過ぎません。これらの列国は連合、同盟を繰り返し覇権を争います。



やがて「覇者」といわれる実力者たちが現れ、弛緩した周王朝に代わって諸侯の盟主となり、「中原」と呼ばれる地域、すなわち黄河中流の南北の地域の秩序維持にあたりました。特に「春秋の五覇」と呼ばれた、齊の桓公、晉の文公、宋の襄公、秦の穆公、楚の荘王、それに、「臥薪嘗胆（将来の成功を期して長い間辛苦すること）」の故事で有名な、呉の闔廬

と越の勾踐などが続々登場して、歴史に国家の興亡や多くの人間悲喜劇を刻みました。

そして春秋時代も後半になると、二大大国の楚と晉が、その中間にある小国・鄭の争奪を発端に、両国が代わる代わる覇者となる、いわゆる「晉楚争霸」が熾烈を極めます。晉・楚の形勢次第で齊や衛、宋といった国は、晉に付いたり楚に味方したりの自国防衛戦、南方では呉越の仁義なき戦いが繰り広げられます。当然、孔子の故国である魯も戦禍に巻き込まれる。加えて、齊の桓公の縁戚から分家したことから「三桓」と呼ばれる孟孫氏、叔孫氏、季孫氏という家老たちが実権を握って君主を脅かす。このようなハチャメチャな構図の戦乱絵巻の最中に孔子は生を享け、「徳治主義」の蠅頭（はかない抵抗の喩え）をかざして諸国を遊説しながら、孤軍奮闘することになるのです。

「春秋」の注釈書の一つである「春秋左氏伝」や、「国語」「晏子春秋」「戦国策」そしてそれらを参酌した「史記」の「世家（諸侯の家柄の記録）」は、そうした諸侯の国盗り物語や卿大夫の権謀術数・下克上の逸話で満載です。

この章では、孔子の生涯を概観する前に、「論語」に登場する「春秋の五覇」である齊の桓公及び晉の文公、そして桓公の宰相であった管仲、後の齊の景公の時の宰相・晏平仲（晏嬰、晏子）、孔子が周公に次いで慕った鄭の子産について、前記文献から幾つか故事を拾って紹介しておきたいと思います。孔子が彼らを人物評した言葉（月旦評と言います）の歴史的背景を知ることによって、その短い文章の由縁となる深意を察し、ひいては孔子の考え方を理解することができるからです。

【齊の桓公と管仲】

齊は、前に述べたように、西周の文王から太公望呂尚が封ぜられた国です。「史記」・齊太公世家に、「太公望国に至り、政を修め、その俗により、その礼を簡（約）にし、商工の業を通じ、魚塩の利を便にす。しかして人民多く齊に帰（属）し、齊、大国となる」と書かれているように、齊は商工業で発展した山東省地域の富裕な国家でした。

襄公の時、齊は乱れます。紀元前六百九十四年頃、襄公が自国の隆盛を笠に着て、妹で魯の君主夫人である文姜とたびたび密通し、それを知って怒った魯の君主を、彭生という力持ちを使って車上で殺害してしまうという事件が勃発します。襄公は魯国に非難されるのを恐れ、彭生に一切の罪を着せ、これも殺してしまう。魯は弱小国の故に齒軋りしたまま泣き寝入りして耐えます。国人も怒り、襄公に恐れを抱いた襄公の弟、糾と小白はそれぞれ魯と莒に亡命してしまいました。その時糾に従ったのが管仲と召忽で、小白（後の桓公）を奉じたのが鮑叔牙です。

ある時、襄公は、廉直な二人の大夫に葵丘という土地の守備を命じ、「瓜の時（七月）に行き、瓜の時に帰国させて交代させよう（すなわち一年間だけの勤務命令）」と約束したにもかかわらず、時期が過ぎても一向に任地替えの音沙汰がない。そこで二人は交替を願い出たが、許されなかった。遂に彼らは、襄公の父・僖公に寵愛された僖公の弟の子の公孫無知

を擁立^{ようりつ}して反乱を起こし、襄公を殺害しました。しかし、公孫無知も、日頃虐待していた大夫の殖^{ようりん}に殺されてしまいます。

齊の人たちは、小白を跡継ぎに迎え入れ、魯国は兵を出して糾をバックアップし互いに戦いましたが、魯軍側が敗れて小白（桓公）が齊公に即位します。糾は処刑され召忽も殉死しました。管仲も、かつて桓公が^{きよ}宮から来る道を待ち伏せして、桓公を射て、帯がねにあてたことがあり、囚われて当然死刑に処せられるべき身でしたが、友人の鮑叔牙^{ほうしゅくが}が、桓公に、「天下の覇者たらんとするなら、管仲を宰相にすべきです」と説いて聞き入れられ、桓公に重く用いられるようになったのです。現在でも「友人同士の親密な交際」のことを、「管鮑^{かんぼう}の交わり」で喻えますが、管仲と鮑叔牙の深い友情故事から生まれた言葉です。「史記」（管・晏列伝）は次のように伝えています。

<管仲曰く、私がもと貧乏だった時、鮑叔^{ほうしゅく}と一緒に商売をしたことがある。儲けを分配するのに、自分の取り分を多くしたけれど、鮑叔は私を貪欲だとは言わなかった。私が貧しいのを知っていたからだ。又、私がかつて鮑叔のためにある計画を立て、かえって困窮に陥ったことがある。でも鮑叔は私を愚かだと言わなかった。時に利と不利があることを知っていたからだ。私は昔、三人の主君に仕え、三度も追い出された。その時も鮑叔は、私を不肖者とは言わなかった。時に運不運があることを知っていたからだ。そして又、私は三度の戦で三度とも逃亡した。が、鮑叔は私を卑怯者とは言わなかった。私に老いた老母がいるのを知っていたからだ。更に、公孫無知の乱後、公子・糾が敗れ、私は幽囚^{ゆうしゅう}されて辱めを受けたが、鮑叔は私を恥知らずとは言わなかった。私が、小さな節義よりも功名が天下に顕れないことを恥とする男であることを知っていたからだ。我を生む者は父母、我を知る者は鮑叔だ、と>

後に唐の大詩人・杜甫^{とほ}は、「貧交行^{ひんこうこう}」と題する絶句（起承転結で成る四行漢詩）で、彼の時代の交友関係の軽薄さを、この故事を引いて風刺しました。

翻手作雲覆手雨	手を ^{ひるがえ} 翻せば雲と作り手を ^{くつがえ} 覆せば雨
紛紛輕薄何須數	紛紛たる輕薄何ぞ数うるを ^{もち} 須いん
君不見管鮑貧時交	君見ずや管鮑貧時の交り
此道今人棄如土	此の道今人棄つること土の如し

さて、管仲を得た桓公は、その恵まれた地理的条件や、管仲の献策による製塩・製鉄業を盛んにし、物価を統制し、軍隊組織を整備して富国強兵策を推進します。管仲の有名な言葉に「倉廩^み（倉庫）実ちて礼節を知り、衣食足りて榮辱を知る」（管子）というのがあります。政策が奏功して経済が発展し庶民は裕福になり、齊国人はみな喜んだという。

やがて桓公は燕王^{えんおう}の請いに^{こた}応えて、北方辺境から燕に浸入した異民族の山戎^{さんじゅう}を追い出し、

又、諸侯を率いて狄を破って衛を再建し、楚が周王朝に朝貢しない非を責め、又、かつて周の昭王が南征して溺死して帰れなかった消息についての責任を問い、「尊皇攘夷」の御旗を掲げて周室を尊び、中原の安定に尽くしました。紀元前六七九年、遂に諸侯の盟主となり、「春秋の五霸」の最初の覇者となります。「論語」憲問篇に孔子と弟子の子路及び子貢の管仲評が載っています。

子路「桓公は、公子の糾を殺しました。そして召忽は殉死したのに管仲は死にませんでした。（そして仇の桓公に仕えました）仁とはいえないでしょうね」

孔子「桓公が諸侯を九合（会合）して、武力を以てしなかったのは、管仲の力だ。（殉死しなかったのは小さいことで）誰がその仁に及ぼうか。誰がその仁に及ぼうか」（憲問第十四の十七）

子貢「管仲は仁者じゃないでしょうね。桓公が、公子・糾を殺して、殉死せず、しかも仇の桓公を補佐しました」

孔子「管仲は桓公を補佐して、諸侯の覇者とし、天下をすっかり整え匡した。人民は今に至るまでその恩恵を受けている。もし管仲がいなかったら、我々は辺境の異民族のように、ざんばら髪で襟を左まえにした野蛮な風俗になっていただろう。つまらぬ男女が、小さな義理立てをして首吊り自殺し、溝に捨てられたまま終わるというのと同じにできようか」（憲問第十四の十八）

「大行は細謹を顧みず」という言葉が、「史記」（項羽本紀）にあります。「大行」すなわち大きいことを行う時には、「細謹」すなわち些細なことを顧慮しない、という意味です。子路や子貢が管仲の変節を不仁だとしてなじったのに対して、孔子は寧ろ小節を捨てて大業をなしたのが管仲だ、として管仲を最高級に賞賛しています。

「仁」についての概念は後ほど詳しく述べますが、弟子たちが考えているような、単に「隣人を愛し慈しむ」という認識レベルから、「人民や民族や文化を守るための博愛や慈悲の実現」という総合概念としての「仁」に、彼らの目を向けさせている孔子の発言がここに見られます。

さて、桓公はその後次第に慢心して、たびたび行き過ぎをやらかしますが、管仲に再三諫められ、最終的には管仲の意見を容れ、治世に大過なきを得ます。桓公は「一にも管仲、二にも管仲」と言って重用し、下賜が絶えません。そのため管仲の富は桓公のそれに匹敵し、「史記」（管・晏列伝）では、「三歸（三つの邸宅）と反玷（君主にだけ許された盃を戻す台）さえあったが、齊の人々はそれを奢侈に過ぎるとは思わなかった」とあります。先ほどと同じ憲問篇にこれに類した記事が載っています。

（或る人が）管仲を問う。子曰わく、「管仲は、伯氏から三百戸の駢の村を取り上げ、そ

のため伯氏は粗末な食事をしなければならぬ身になったのに、生涯管仲への怨み言は言わなかったそうだ。(管仲は偉大な政治家だった)」と。(憲問第十四の十)

ところが、「論語」・八佾篇で、「三帰や反坫」のことに関して、孔子は一転して、管仲に強烈なパンチを食らわしています。

子曰わく「管仲の器は小なるかな」と。

或るひと曰わく「管仲は儉(約)なるか」

(孔子)曰わく「管仲に三帰あり、どうして儉約といえようか」

(或るひと曰わく「管仲は礼を知っていますか」

(孔子)曰わく「国君は目隠し樹の塀をする。管仲も陪臣の身でありながらやってる。又、反坫を持っている。管仲が礼をわきまえているというなら、礼をわきまえない者なぞ誰もいない」(八佾第三の二十二)

古来、憲問篇の三章とこの八佾篇の、管仲に対する月旦評の矛盾をどう説明すべきかは、学者により諸説紛々です。司馬遷もこの問題を取り上げ、孔子が「管仲の器は小なるかな」と言ったのは、桓公は賢君だったのだから、いわゆる力づくで天下を牛耳る「覇者」と称されるのではなく、もう一步進めて、古代聖王のように、心から信服される「王者」と賛嘆されるように、管仲がなぜ桓公を補佐しきれなかったのか、という無念さを表した言葉なのだろうか、と述べています。

さすがに「孟子」なども読み込んでいた司馬遷だけに、穿^{うが}った解釈だと思いますが、私は、孔子が是々非々(良いことは良い、悪いことは悪いと事に応じて判断すること)の評価をする人だから、管仲は天下の大仁を行った比類なき立派な政治家だったが、それはそれとして、三帰や反坫などという分不相応なものを所有したことには大いに不満だった、と端的に解釈すればよいのではないかと考えています。

【斉の賢人宰相・晏平仲】

ところで、桓公はなかなかの好色家で、寵愛する妃が多く、夫人待遇の愛妾が六人もいました。そのため管仲が亡くなると、桓公の後継の椅子を狙って、群公子の間に、激しい相続争いが絶え間なく続きました。時代の趨勢^{すうせい}もまたしかりで、政治の実権はやがて君主から、卿大夫^{けいたいふ}の手に移っていきます。そんな中、管仲の約百年後、斉には賢人宰相・晏平仲^{あんぺいちゅう}(晏嬰、晏子)が登場します。「論語」公冶長篇に孔子の晏平仲月旦評があります。

子曰わく、晏平仲、善く人と交わる。久しくして(人)これを敬す。(公冶長第五の十七)
(先生がいわれた。晏平仲は人との交際が立派だ。交際が深まるほど人は彼を尊敬した)

(人)は、原文にこの文字がないのが普通で、^{おうがん}皇侃という学者系の日本の古写本にだけ入っているのだそうです。(人)を入れないと、「晏平仲がいつまでも相手を尊敬した」となり、どうもスッキリいかない。私は(人)を入れて読んでいます。この例に限らず、当時の書物は、竹簡や木簡を綴じたものでできていましたので、テキストそのものに錯簡(綴じ違いや欠落)が生じたり、古写本のミスがあったりで、今となっては、どれが正しいのか判定不能な文章が幾つもあります。そのために、古典解釈が諸説の多岐にわたる不都合と、逆に多面的に謎解きができる痛快さを同時に秘めていると思います。

閑話休題、晏子(晏平仲)に戻ります。(人)を挿入する説に加担するには理由があるのです。それは「春秋左氏伝」で晏子の言動を追いつつながら読むと、そこには自分のことには無欲恬淡で、信や礼を重んじ、冷徹なものの見方をし、容赦なく直言する晏子像が^{ぼうみつ}彷彿するからです。彼が厳然としていて近付きにくい性格だったために、交際が深まってやっと理解できた、というべきなのではないか。幾つかエピソードを紹介しておきましょう。

<晏子の父、晏桓子(晏弱)死す>

齊の大夫だった父の晏桓子が死んだ。晏嬰は、あら布で作った胸掛けや^{へり}縁縫いをしない喪服をつけ、麻の首巻と帯をまとい、竹の杖をつき、菅の草履をはき、^{かゆ}粥をたべ、さしかけの小屋に住み、草むしろの上に寝、草を枕として喪に服した。家臣の老人が言うには、「そのお姿は大夫の家の礼ではございません。土の礼です」と。晏子は言った、「私は卿ではない、卿である者のみが、大夫の礼を為すのだ」と。

<齊公(景公) 晏子の宅の改築を勧め、晏子断る>

晏平仲が非常な質素儉約家であったのは有名な話で、「食は肉を重ねず、^{しやう きぬ き}妾は帛を衣ず(肉はただ一種類しか食わず、女どもに絹は着させなかった)」「(史記・管晏列伝)」といわれるほどだった。

かつて景公が、晏子の住まいが、市場に近いので騒がしく、土地が低くて狭くごみごみしているという理由で、他の場所に用意してやろうと言った。晏子が「現在の住まいは、父が住み、自分にとっては過分なくらいです。しかも市場に近くて便利ですから」と断った。景公がかからなくて、「市場に近いなら、貴公は物価で今何が安いかわかる、よく存じているだろう」というので、晏子は、「義足が高く、普通の履物は安うございます」と答えた。景公が刑罰を乱発し、受刑者用の義足が高騰しているのを皮肉ったのである。景公はこれによって刑罰を減らした。

晏子が晉への^{つか}遣いから帰ると、景公は勝手に住宅を改築し、すでに完成していた。晏子は齊公に拝謝し、早速これを取り壊し元通りにし、以前の住人を呼び戻した。景公は許さなかったが上席家老を通じて請うて許可された。

< 齊公（景公）と晏子の「和同の弁（和と同の区別）」 >

狩から帰った齊の景公が宰相の晏子に言うには、「^{きよ}擲という男だけがわしと和するわい」と。すると晏子は答えた。「擲などという男はせいぜい「同」がいいところ。とても「和」とは申せません」と。景公不思議に思い、「和と同とは違うものか」と問いただした。

晏子曰く、「「和」というのはスープを作ることで譬えれば、水と火、酢や塩や梅等を用いて魚肉をぐずぐず煮込み、調理人がこれを^{あんぱい}塩梅します。味が濃ければ薄め、足りなければ味を加えます。君臣の関係もこれと同じです。君がよしとされても不可なる点があれば進言して、君がよしとされることを成就するようにし、君が不可としてもよき点あらば進言して、君の不可とされることを可に変える、かくして政治は妥当を得るのです。今、擲という男は何にでもイエスマンです。それでは料理に水だけを加え、音楽の演奏にハーモニーが生まれないのと同じです。異質を巧みに調和するのを「和」というのであって、付和雷同の「同」と混同なされませぬように」と。

< 景公の「死の嘆き」を慰める >

景公と晏子が酒を飲んで楽しんでいました。景公曰く、「昔から人は死ぬ運命にあるが、死というものがなかったらどんなに楽しいことだろう」と。晏子^{こた}対えて曰く、「昔から死が無かったら、それは昔の人の楽しみです。どうして殿が楽しみを得ましようぞ。昔、^{そうきゅう}爽鳩氏が始めてこの地に居り、^{きそく}季前、^{ゆうほうはくりょう}有逢伯陵、^{ほこ}蒲姑氏、と代々受け継がれ、その後大公（呂尚）が継がれて殿に至っています。古より死が無かったら、始祖の爽鳩氏の楽しみが続き、殿の楽しむことなど無いことになります」と。

以上の挿話から推しても、晏子はまさに冷徹で合理的精神の賢人だったことが伺われます。晏子が宰相として活躍したのは、景公の時代です。先代の莊公は、淫乱愚昧な君主だったため、^{さいちよ}崔杼という大夫に暗殺され、慶氏がさらに崔杼を弑す、そして慶氏も出奔するという、齊が茶番劇を繰り返した後の事態收拾役が晏子の最初の任務でした。その後景公を諫め励まして、名家・齊の威信を取り戻すべく、現実的な富国政策を推進しました。景公も先述の挿話で分かるように、パフォーマンスだけの暗愚な君で、好んで宮室を豪奢に飾り、狗馬を集め、重税を賦し、刑罰を重くしようとしました。

晏子は、景公が、齊の領域に彗星が現れた不吉だといったのは憂え、^{かいせん}疥癬（ひどくかゆい病）の治療の効果が無いといって騒ぐときを狙って、景公の悪政が百姓の苦怨となって^{たた}集っている、徳を修めるべし、と手厳しく諫言して、政令を緩めさせ、閑所を廃止し、禁令を解き、賦税を軽減し、負債を免除させようと努めました。

孔子が三十五、六歳前後に、齊を訪問しています。景公が政治について孔子に問うた有名な場面が「論語」顔淵篇に記載されています。

齊の景公、政を孔子に問う。孔子対えて曰わく、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり。(齊)公曰わく、善いかな。^{まこと}信にもし君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらずれば、粟(米)ありと雖も、吾れ豈に得てこれを食らわんや。(顔淵第十二の十一)

(齊の景公が、政治について孔子に訊ねた。孔子が答えて言うには「君は君らしく、臣下は臣下らしく、父は父らしく、子は子らしくそれぞれの道(役割や使命)を尽くす(又は、尽させる)ことです」と。それを聞いた景公が言われた、「よくぞ申した。確かに、君君たらず、臣臣たらず、父父足らず、子子たらずれば、米があったところで、^{わし}朕はどうしてそれを食べようぞ、と)

この問答は、政治上あるいは処世上の普遍的原理を述べた、最も有名なものの一つです。勿論それは実践してこそ意味のあることです。景公はパフォーマンス型君主ですから、これだけ善いことを言っておきながら、孔子と政治談議しただけで終了です。君主たるものの使命は民衆の安寧にある、という唯一無二の役割意識が心に根ざしていないのですから、結局、「君君たらずに、粟を食い」しました。その証拠が、「論語」季子篇に載っています。

齊の景公、馬千駟(四千頭の馬)あり。死するの日、民徳として称すること無し。(季子第十六の十二)

「馬千駟」は、四頭立て馬車1千台分の馬の意で、馬が四千頭ということ。すなわち、景公は四千頭もの馬をもつほど私腹を肥やししながら、重税を賦し、人民には何ら恩恵を与えなかったので、景公が死んだ日、誰も涙を流さなかった、と言うのです。

孔子の十二代孫に当る孔安国という人が著したとされる「古文孝経序」に、「君君たらずと雖も、臣^{もつ}以て臣たらずんばあるべからず」、と言っていますが、晏子が、暗君の景公を側面からがっちり補佐したおかげで、悪政も大乱に至らず、治世に事なきを得たというべきなのでしょう。

ところで、「史記」孔子世家には、「君君、臣臣、父父、子子」の問答の後日に、又、景公が孔子と政治上の問答をやり、孔子が「政治の要は財を節するにあります」というのを景公が満足して、或る土地を孔子に与え、賓客に登用しようとしたら、晏子が反対したので、それから孔子を遠ざけたという記事があります。

晏子の孔子登用反対理由は、一体に孔子のような儒者は、口先ばかり達者で、傲慢で、自分だけが正しいと思っているから民を教える手本に相応しくないこと。文王や周公の如き聖人が没してから、周王室も衰え、礼儀や音楽の規範がすっかり欠け失せ、それを孔子が復活させようと色々やっているが、規則がややこしく非実用的で齊の風俗に相容れないものであること、の二点でした。かくして、景公は孔子を見切りますが、そのシーンが「論語」微子篇に載っています。

齊の景公、孔子を待つに曰わく、「先生を迎えるとして、その待遇だが、魯国の上卿である季孫子と同じにすることはできない。まあ、季孫子と孟孫子の中間ならどうかと思うが」と。やがて又曰わく、「朕も老いてしまった。もう先生を用いることはできぬ」と。孔子は去った。(微子第十八の三)

景公が理念を持たず、優柔不断であったこともさりながら、評論家・孔子の掲げる理想的「徳治主義」が、実務家である宰相・晏子が推進中の、現実的合理主義政策を阻害する国情にあったことが、孔子を齊から立ち去らせた原因であろうと思います。皮肉なことに、晏子を誉めた孔子が、当の本人に反対されて政務執行の登用チャンスを失うことになったのです。孔子の理想も、残念ながら、T・P・O(時、処、状況)を得なかったということでしょうか。後ほど「運命論」を論ずる章で色々考えてみたいと思います。

【孔子の晉の文公批判】

さて、ここまでに、「論語」に登場する「春秋時代」の関係者である齊の桓公と管仲、そして景公と晏平仲について、故事を掲げながら語ってきました。次は晉の文公の出番です。「論語」憲問篇にある、桓公と文公の評価に対する月旦評の背景を通して、孔子の考えを理解してみようと思います。

子曰わく、晉の文公は、^{いつわ}譎りて正しからず。齊の桓公は正しくて譎らず。(憲問第十四の十六)

この文章は、そのまま、「晉の文公は^{いつわ}偽って正しくないが、齊の桓公は正しくて偽らなかった」と読むのが通説ですが、江戸時代の儒者、^{おぎゅうそらい}荻生徂徠や中国・清の^{りゅうほうなん}劉宝楠という学者は、そもそも、譎を偽りの意味とせず、^{きけん}詭や権すなわち非常事態に対する処置の意だ云々、とする異論を立てます。私は通説を是としますので、それについて解説していきます。

晉という国家は、暴虐な殷の紂王を放伐した周の武王の弟、^{しゅくぐ}叔虞を初代とする山西省を拠点に発展した、「春秋時代」に十数カ国が覇を競った列国の一つです。一時期、^{きよくよく}曲沃の武公によって滅ぼされましたが、十九代目の^{けんこう}獻公によって再興され、四半世紀の隆盛をみます。しかし、獻公の晩年に、驪姫という騎馬民族の驪戎の娘を寵妃にしてから、いわゆる「驪姫の陰謀」のため相続争いが続いて国が傾き、群公子が王位継承・剥奪を繰り返した後、国外に亡命すること十九年、辛酸を嘗め尽くした公子・^{ちやうじ}重耳が帰国するに及んで、晉の最盛期がもたらされました。

この重耳が、齊の桓公に次いで諸侯の盟主(春秋五霸の第二)となった文公です。孔子

の時代を遡ること約百五十年前のことです。「春秋左氏伝」や「国語（晉語）」には、文公に関する記事が名文で活写され、巻中の白眉をなしています。最近の労作に、宮城谷昌光氏の「重耳」（講談社）があります。文公は、「城濮の戦い」で敵大国の楚を破って覇者になるのですが、そこに至るまでの概略を、「春秋左氏伝」から拾って紹介し、その後「晉の文公は譎りて云々」について述べることにいたします。

< 驪姫の陰謀 晉国乱れる >

かつて、晉の献公が驪姫を正夫人にしたいと思って、これを龜甲で占ったところ凶と出ました。そこで筮で再び占わせたところ吉と出た。献公曰く、「筮の占いに従おう」と。易者が言うには、「筮には短所があり、龜甲は優れています。龜甲に従う方がよいと存じます。しかもその占いの言葉に、「これ（驪姫）を専らにすると増長して心がかわり、献公の大切な羊を盗むことになるだろう、とあります。必ず問題が起こります」と。献公はそれを無視して驪姫を正夫人にしました。驪姫は奚斉を生み、娣は卓子を生みます。

驪姫は、その子奚斉を世継ぎにしたいと思い、曲沃は宗廟の所在地、蒲と屈は国境の要地だから、皇太子の申生を曲沃、重耳（後の文公）を蒲、夷吾（後の恵公）を屈に置いて国を固めるべきだ、と献公に説き、公子たちを遠方に追いやり、自分たちの子の奚斉・卓子を都に住ませました。

さらに驪姫は、まさに奚斉を立てようとする際、皇太子の申生に謀叛の罪を着せようと謀ります。驪姫は太子に「献公におかれては母上の夢を見られた。速やかに母君を祭りなされ」とすすめ、太子は曲沃で母を祭り、お供えの酒肉を献公に贈り届けます。時に、献公は狩に出かけていました。驪姫はそれを六日間宮殿にしまっておき、献公が帰るや毒を入れてすすめました。献公が先ず、地に注いで祭ると、地面が盛り上り、犬に与えるや犬が倒れ、さらに小臣に試飲させたところ小臣もまた倒れた。驪姫泣いて曰く、「太子の陰謀です」と。献公の怒り激しく、太子は曲沃に出奔し、遂に、新城で首をくくってしまいました。驪姫が他の二公子まで中傷したので、重耳は蒲に、夷吾は屈に奔ります。

献公が亡くなると、驪姫の反対派が決起して、重耳を推す太夫の里克が奚斉と卓子を殺害してしまう。一方、夷吾を擁立しようとする大夫の卻芮が、秦の穆公に賄賂を贈ることを薦め、夷吾は秦の後ろ盾を得て重耳派を退け即位しました。これが恵公です。

< 亡命十九年 重耳の流浪の旅 >

すでに四十三歳になっていた重耳は、恵公派からの追手を避けるため、後に名臣として大活躍する狐偃・趙衰など、幼少時代からの忠実な臣下と共に長い流浪の旅に出ました。国許の恵公に追われ、母親の故郷である狄につくと、一族の娘を献上され、重耳は狄に十二年いてそこを去ります。その後諸国を転々とします。

衛に立ち寄りますが、衛君は礼遇しなかった。農夫に食を乞うと、重耳に土塊を与えるばかり。重耳は怒ります。狐偃曰く、「天の賜なり、土塊をくれたということは、天が国

土を下さるということです」と、稽手^{けいしゅ}して受けてこれを載いた。(孤偃の機転見事なり！)

齊にゆくと桓公は歓迎し、重耳に妻^{きょうし}(姜氏)を娶わせ、馬二十乗を賜りました。重耳は居心地がよく齊の生活にすっかり安んじ、ここで永住しようとも思う。孤偃等臣下の者たちは大志を忘れたそんな重耳に不満です。そこで、重耳を連れて齊を去ろうとして策を桑下で練っていたら、桑摘みの女に立ち聞かれ、姜氏に報告される。姜氏は即座にその女を殺害し、重耳に言いました。「貴方は天下に雄飛しようというお方、早くこの地を去るべきです。懷^{かい}と安(惰性と安楽)に溺れていては功名を妨げます」と。重耳聴かず。そこで姜氏は孤偃と図って、酒に酔わせて齊から送りだしました。

楚にいくと、楚の成王は面倒を見るそのお返しを要求しました。重耳が「もし殿様のお陰で晋国に帰還できた場合、いずれ晋と楚が戦争することがあっても、中原で遭遇したら、戦いを避けて、九十里退却いたしましょう」と答えると、宰相の子玉が烈火のごとく怒りました。楚王曰く、「重耳は度量があってしっかりしている。生彩があっても礼もある。その従者は厳肅で心広く、忠実でよく努めている。重耳こそ晋の救世主になる人物だ」と。すなわち、彼らを秦に送り届けました。

秦の穆公は重耳に侍妾五人を与えて礼遇しました。その頃国許では恵公が崩じ、その子の懷公の時代。雌伏すること十九年にしてやっと重耳に大運が巡ってきました。晋の人々が重耳を慕い、使者を立てて迎え入れに来たのです。重耳は穆公の後ろ盾を得て懷公を殺害し、晋に戻って即位することができました。

<城濮の戦い 文公覇者となる。(BC633年頃)>

文公・重耳が本国に入るや、善政を敷き、人民を軍事訓練すること二年にして、国力が充実してきました。中原の覇者になる野望も芽生えてきました。参謀・孤偃の献策を受けて、外交政策として周王(襄王)の地位を安定させ、国内では人民に義・信・礼のなんたるかを文公自ら率先垂範して教示しました。それにより更に民衆の生活は安定し、民の商いが正当に行われ、民は目上の者の言うことを素直に聴くようになりました。かくして国は富み、兵士は十分訓練され、戦いの準備は整いました。

「城濮の戦い」は晋・宋・齊・秦の連合軍が楚・陳・蔡の連合軍と衛の城濮で激突した世紀の決戦です。楚が宋を攻めたことが発端となりました。宋が同盟国の晋に支援依頼の使者を立てます。晋はこの要請に応ずべきか否か躊躇しました。文公曰く、「断れば宋との関係は悪化、さりとて楚に中止依頼をしても止めないだろう。そうすると、宋の要請を受けるために齊と秦を味方に引き入れるしかないが名案はないか」。大夫の先軫^{せんしん}が提案しました。「こんな案ではどうでしょう。先ず宋の申し入れを断る すると宋は齊と秦に賄賂を贈り二国が調停に乗り出す その間、我が国は曹と衛を攻めその領地を宋に与える すると曹と衛は楚と親密な間柄ゆえ齊・秦の調停案を受け入れない 結局齊と秦は我が国と接近して共に楚と戦おうとする」と。文公はこの先軫の「迂直の計」(「孫子」にある言葉で、急がば回れ式の策略)を入れて実行することにしました。晋は巧みに諸国を操り、連合体

制を強化したのです

戦闘の火蓋が切って落とされました。晋の文公は、いざ戦う段になって、かつて楚に世話になった恩義に気がひけ、かつ前日、楚の成王と取っ組み合い、文公が組み伏され、成王に脳みそを食われる夢を見ました。凶兆だと文公が脅えていると將軍の欒貞子^{らんていし}は、「小さな恩にいつまでもこだわるに及びません。戦うべし」と言い、孤偃は「夢は吉なり。楚王が脳みそを食ったことは、吸った自分がそれだけ弱くなったことを意味します」と励まします。晋の連合部隊は激戦の末、遂に楚軍を敗ることに成功し、この功により、文公は諸侯の前で周の襄王から覇者の策命を受け、遂に齊の桓公に次いで第二番目の「春秋の覇者」となったのです。

さて、「晋の文公物語」も長くなってしまいましたが、この辺で、「論語」憲問篇の問題の文章をもう一度掲げます。

子曰わく、晋の文公は、^{いつわ}譎りて正しからず。齊の桓公は正しくて譎らず。(憲問第十四の十六)

一体孔子は、十九年もの亡命に耐えたのち本国に帰り、名臣に支えられ、義・信・礼の徳目で人民教化に力を注ぎ、善政を施して国力を蓄え、遂に「城濮の戦い」で楚を敗って天下の覇者となった文公の、どこが「譎りで正しくない」と言っているのでしょうか。

最大の理由は、「城濮の戦い」で、楚を伐つに当たっての大義名分（行動の理由づけとなるはっきりした根拠）が、齊の桓公の場合に比べて私利的かつ権謀術数に満ちたものであったことがあげられます。齊の桓公は前にも述べたように、楚が周王朝に朝貢しない非を責め、又、かつて周の昭王が南征して溺死して帰れなかった消息についての責任を問い、「^{そんのう}尊皇攘夷^{じょうい}」の御旗を掲げて周室を尊び、諸侯と会盟を通じて中原の安定に尽くしました。

桓公は、「^{わし}朕は兵を率いて会盟したのは三度、兵を率いず平和裏に会盟したのが六度。あわせて九回諸侯を会合させ、天下の秩序を正した。古代の夏・殷・周の三代の聖天子が天命を受けたのとそう変わりはあるまい」(「史記」・齊太公世家)と、彼自身豪語したように、諸侯が桓公の威徳に心服し、諸侯から推される形で天子に代わる覇者の地位を獲ました。

一方、晋の文公は、^{せんしん}先軫の裏面工作案を採用し、巧みに諸国を操って戦争に巻き込み、自国の保全と利益を謀ることが主目的でした。確かに文公は、孤偃の献策を受けて、外交政策として周の天子の地位安定に貢献しました。それは飽くまで人民に義の何たるかを教示せんがための人民教化策の一環でした。いわばパフォーマンスです。文公には大義名分があまりにも希薄です。権謀術数が過ぎて、同じ「春秋の五覇」と呼ぶには桓公と格式に大きな差があり過ぎる、孔子はそれを非難しているのではなからうか。

もう一つの理由が、「春秋」に詳しい学者たちによって指摘されています。すなわち、文公が周の天子から覇者の策命を受ける儀式を開催する際に、「天子である襄王を呼び出し

た」とされる無礼を孔子は非難しているのだ、と。

簡単に説明しますと、「春秋」原文にこの会盟の記事は、「天王（周の天子）河陽に狩す」とだけしか書かれていません。これを「晋の文公は天子を河陽に招いた（呼び出した）ので、これを忌み^い憚^{はばか}って、『春秋』の作者が『河陽に狩す』と書いたのだ」と深読みして、文公はけしからん。というのです。この「深読み」のことを「春秋の筆法」といいます。

「孟子」・滕文公篇に「世が衰え、道が行われなくなつて、邪説や暴行が度々起こるようになった。遂に臣下が君主を殺したり、子が父を殺したりするようになつた。孔子はそのような世になるのを恐れて春秋を作つた」とあります。古来、「春秋」は孔子の著作で、史実を記載する際に、禽獣同様の世にならぬよう、その短い表現に倫理的批判を込めた筆法で書いた、とされているのです。だから「春秋」の記事を読む場合は文章の裏を深読みして、批判や賞罰を読み取る必要がある。そうすると前述したように「天王（周の天子）河陽に狩す」という文章は実は文公の非礼を批判しているのだ、というわけです。

因みに現在でも「春秋の筆法」は、「些細な事でも大局に関係があるとして、遠慮せず加える厳正な批判」（新明解国語辞典）の意味で用いられています。（「文芸春秋」はそこから命名されたのでしょう）

いずれにせよ、孔子が「譴^{いつわ}りて正しからず」と言つた理由は以上のようなところにあるようです。「論語」には、晋の文公に関する記事はこの一章だけしか記載されていませんので、孔子が全体像としての文公をどう評価したかは分かりません。ここでは、歴史的背景を知ることにより、^{たとい}仮令、覇者となり、歴史上に名を成した文公でさえ、小手先を弄して私利を謀れば、「正しからず」として、一刀両断に切つて落とす孔子の厳然たる姿勢が、短い文章の裏側に潜んでいることを理解していただければ十分です。

後述するように、季康子が政治のことを訊いた時「政とは正なり」（顔淵篇）と言い、子路が衛君に政治を任されたら先生は真っ先に何をなされるかとの問に、「名を正すことだ」（子路篇）と答えているように、孔子の政治思想の根幹には「正」という概念が重要な位置を占めています。秩序正しく、名分が立つことを是とする一貫した姿勢が文公批判となつて辞をなした、という「論語」深読みの一例でした。

【孔子が尊敬した鄭の宰相・子産】

最後に、孔子が若い頃、夢にまで見て慕つた周公の次に尊敬したと思われる、鄭の名宰相・子産^{しさん}について語ります。子産は、孔子が三十歳の頃に亡くなっているのですが、伝え聞く名望家・子産の事跡は、孔子にとって生きた見本となつたに違いありません。それがあらぬか「春秋左氏伝」には、子産の事跡を述べた後に、「仲尼（孔子）曰わく云々」という形で、孔子の賛^{さん}（批評）が幾つか挿入されています。

鄭という国は、北に晋、南に楚の二大強国に挟まれた中原に位置した小国です。（晏子のいた斉や孔子の故国・魯は東にあります）そんな小国の宿命は、晋についたり楚についた

り定態なく、軍事的・経済的に終始圧迫され、民衆は疲弊し、内乱が頻発していました。

子産の家系はもともと王族であり、父の子国^{しこく}は襄公の公子で政治の中樞を担っていました。子産は本名を公孫僑^{こうそんきゆう}といい、子供の頃から聡明を以て聞こえた有徳の君子でした。かつて父が鄭軍を率いて、蔡^{さい}を敗り、鄭人が戦勝の杯に酔っていると、子産は「こんな小国が文徳もないのに戦勝した。禍これより大なことはない。蔡の後ろ盾である楚が攻めてきたら、にべもなく従わざるを得ないし、そうすれば晉が攻め寄せてくる。晉・楚に攻められれば四、五年間眠れぬ日が続くだけだ」といって非難しました。父は激怒して、「お前ごときに何が分かるか。国に大命があって立派な大臣たちもいる。小董^{こわっば}め、死刑ものだ」といって叱られました。だが不幸にも子産の読みは的中します。鄭は四年後、晉に屈服せざるを得なくなりました。

父・子国はその後、内乱で死亡します。そして子孔^{しこう}という大夫が国政を握りますが、その専横ぶりを憂えた子産は諫言しました。「民衆の怒りは犯しがたいものです。専欲は成り難いもの。民衆を犯せば必ず禍を被ります」と。しかしその後も専政が止まなかったため、国人の怨みを買ひ、子展、子西、が国人を率いて子孔を伐ちました。鄭人は子展を摂政、子西を宰相、子産を卿に任じました。子産がいよいよ政治の表舞台に登場したのです。

卿に任ぜられてからの子産は、外交に、軍事にと八面六臂（一人で数人分の手腕を発揮すること）の活躍をします。晉が、鄭の朝貢に途切れがあるのをなじると、使節は欠かしたことが無いこと、そして小国を牛耳る大国・晉側が政情安定せず、政令が乱れるために朝貢もままならないことなどを筋を通して説得して国交を平和裏に解決。又、かつて陳国が楚と会盟して鄭を伐ったが、その際、陳軍が通過した沿道は、井戸は埋められ樹木は伐採された。子産は子展と七百輛の兵車で攻めて陳に勝ち、鄭人の怨みをはらしました。

子産は無欲恬淡たる人で、鄭の簡公^{かんこう}が先の陳との戦功を賞して六つの邑^{むら}を与えようとしたが、身分の高い方から順に褒章すべきで、今度の場合は子展が一番の功労者ゆえ彼に与えるべし、として辞退した。簡公が聞き入れないので已む無く半分戴きました。それを見て外交官の子羽は、「子産は謙譲の美德を備えた賢人だ。必ずや国政^{つかさど}を掌^{つかさど}るようになるだろう」といったそうです。

大夫の世叔^{せいしゆく}が子産に政治を問うたとき、子産曰わく、「政は農作業の如し。日夜これを行い、その始めを慎重に思い、その終りを立派に成し、朝夕仕事に精出し、自分の能力以上のことはしない。農地に畔道の仕切りがあるが如くならば、過失は少なくて済むだろう」と。

その後、鄭は内乱があったり、飢饉があって窮乏しますが、子展の子である上卿の子皮が善政を敷きます。そして子産の人格に敬服して彼に政権を譲渡しました。紀元前五四三年のことで、孔子が十歳の時です。政を行うこと一年。国庫が余りに乏しいため、奢侈を禁じ、相互扶助で税を課す政策を強行しました。民衆からは非難^{ひなん}轟々^{ごうごう}。「田んぼ泥棒を殺せ」の大合唱です。三年たつとこんな歌謡が村々にはやりだしました。「わしらの子弟を子産が教え、わしらの田畑を子産が増やす。子産が死んだら誰が継ぐ」。政治は軌道に乗りました。

「論語」の公治長篇と憲問篇に、孔子が子産を高く評価した言葉が載っています。

子、子産を謂う。「君子の道を四つ備えていた。身のふるまいは恭しく、目上に仕えるには敬（つつしみ深い）、人民を養うには恵（恵み深い）、人民を使役するには義（正しいやりかたでやる）」と。（公治長第五の十六）

孔子が或る人に、子産はどんな方ですか、と問われると、「恵人なり（恵み深い人だ）」と答えた。（憲問第十四の十）

子産は礼儀正しく、長上を敬い、人民には仁恵を施し、義に適った方法で使役しました。殊に、「恵」という文字が二度使われていることから、「恵み深い人」というのが、子産を表現する一番適切な言葉だったのかもしれませんが。

しかも、外交面ではまさに身体を張って丁々発止のディベートをやったのけます。小国・鄭の命運に賭ける凄みと人民にたいする恵み深き人。西洋でいう「ノーブレス・オブリージ（高い地位に伴う道徳的・精神的義務）」（広辞苑）の見本みたいな人物で、孔子が「恵人」と言った深意にも、当然、彼の宰相としての強い使命感・役割意識が含まれていた、と考えて間違いなからうと思います。

子産は、政を為すに当り、有能な人材を^{えら}び込んでこれを使った、だから失敗しなかった、と「春秋左氏伝」に述べられ、その関係者名が挙げられています。「論語」憲問篇にも、外交文書作成にあたり、専門家のそれぞれが、得意分野の仕事を役割分担して作業し、交渉に落度なきよう深慮遠謀したことが記載されています。

子曰わく、「（鄭の外交文書は非常にすぐれていて落ち度がなかった。）命令書を作る時は、^{ひじん}卑諶がこれを草創し、^{せいしゅく}世叔がこれを討論し、外交官の子羽がこれを修飾し、東里にいた子産がこれを潤色したからだ」と。（憲問第十四の九）

草創（起草） 討論（検討） 修飾（添削） 潤色（脚色）というステップを踏んで、それぞれ得意分野の専門卿大夫が分担してタスクフォース（特定任務遂行専任チーム）を組み、文書に遺漏なきよう努めた、ということです。この手順は現在でも通用する妙法です。子産の有名な言葉に「人の心の同じからざるは、その面の如し」というのがあります。十人十色の考えがあるのは人の顔が全て異なるのと同じだ、という意味ですが、子産は異質な人材の長所を適所に使った人だった、といつてよいと思います。

孔子が政治理念を描くに際して、近世の模範的人物となった子産だけに、語るべき佳話はたくさんありますが、「春秋左氏伝」から、後世まで語り継がれた三つの逸話を拾って、子産伝を締めくくことにします。

<子産は郷校を廃止しなかった>

鄭人は、郷校（村里にある学校）に集まって、よく政治や時事の議論をした。大夫の然明が、子産に曰わく、「郷校を廃止してはどうでしょう」と。

子産曰わく、「何でその必要があろうか。人々は朝夕働き、仕事を終えてから学校に集まって、政治の善し悪しを議論している。人々の善しとする所のものは、私はそれを行い、その悪しとするところのものは改めよう。人々の意見は我が師というべきもの。それをどうして廃止する必要があるか。私はまごころを以て善いことをすると、人々の怨みを受けないと聞いている。威嚇^{いかく}して怨みを防ぐということを聴かない。にわかになんかの批判を止めることができないわけではない。しかし、それは川を防ぐようなもので、堤防を大いに決壊すると、人を傷つくること必ず多く、手のつけようがない。少しずつ決壊して、流れを導くにこしたことはない。彼らの意見を聞いてこれを薬とするのが一番だ」と。

<子産は巫術^{ふじゅつ}などの迷信を排撃した>

夏五月、大火の星が黄昏に見え始めた。魯の大夫・梓慎^{ししん}が、「これは融風といって、火災の始まりだ。七日目にきっと火災が起こる」と言った。三日目から風がひどくなり、宋・陳・鄭に皆火災が発生した。鄭の巫術師^{ふじゅつし}が「私の言葉を用いないと、鄭に又火災が発生する」と言ったので、世叔が心配して子産に相談すると、子産曰く、「天道は遠く、人道は近し。人が及ぶ所ではない。何でそれを知ることができようか。巫術師ごとき者にどうして天道が分かつぞ。彼はおしゃべりだから、たまに当たることもあるだろうが。どうして信用できようか」と。遂に巫術をやらせなかった。火災は二度と起こらなかった。

<紀元前五二二年、鄭の子産死す 子産の遺言>

子産が病気になる。世叔^{せしゆく}に言うには、「私が死ねば貴方が必ず執政の座につくはずだ。古来、ただ有徳者のみがよく寛大を以て民を服すもの。そうでなければ、次善策として、厳格にやるにこしたことはない。喩えてみれば、火は烈しい。だから人民はこれを見て畏れる。従って焼け死ぬ者は少ない。一方、水は柔弱だ。だから人民は慣れあなどってこれを玩ぶ。従って水死者が多い。故に寛大は難しい」と。病むこと数月にして死んだ。

世叔が執政の座に就いた。子産の遺言通り厳格にやることに忍びず、寛大に行った。すると、鄭の国には、盜賊^{かんふ}が萑符の澤にたくさん寄り集まった。世叔、それを悔いて言うには、「自分がもっと早く子産の言葉に従っていたら、こんなことにならなかったろうに」と。兵を出して萑符の盜賊を攻め、盡くこれを殺した。盜賊は少し収まった。

孔子曰わく、「善いかな。政^{まつりごと}は寛大なれば、人民は慢^{あなど}る。慢ればこれを正すに厳格を以てす。厳格なれば則ち人民は害される。害されればこれを施すに寛大を以てす。寛大は厳格^{すく}を済い、厳格は寛大を済う。政は、是^{これ}を以て和す」と。

子産死するに及び、孔子はこれを聞き涕^{なみだ}を流して言うには、「古の遺愛^{いあい}なり（あの方の仁

愛には、古人の遺風があった)」 と。

以上で、古代伝説時代から春秋時代初期の歴史上の人物で、「論語」に登場して孔子の月旦評にしばしば取り上げられた人々やその事跡を通じて、側面から孔子の思想の淵源^{えんげん}の一端を探ってきました。そしていつしか齊の晏子や鄭の子産など孔子存命中の偉人たちにまで歴史は降ってきました。紀元前七百七十年の周室の東遷から始まった春秋時代も既に後半に差しかったのです。いよいよ主人公である孔子の生涯を語る時がきました。